

新潟大学
旭町
学術資料
展示館

Niigata University
Asahimachi Museum

あさひまち

新潟大学旭町学術資料展示館ニュースレター 第22号 2024年7月 ISSN 2185-7431

「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト —近世から現代まで」を実践して

新潟大学旭町学術資料展示館 館長 丹治 嘉彦

昨年、「みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト—近世から現代まで」が、新潟大学旭町学術資料展示館をはじめ近隣の文化施設や寺院、飲食店において開催された。この事業は令和5年度文化庁Innovate MUSEUM事業に採択されたもので、これからの博物館に新たに求められる社会や地域における様々な課題（地域のまちづくりや産業活性化等）に対して、多様な機関と連携しその解決に先進的に取り組むことが求められた。

新潟大学旭町学術資料展示館のある西大畑地区は、新潟の昔の姿を現代に伝える建築物、たとえば旧齋藤家別邸や砂丘館等が多く残り、また、行形亭や加島屋といった新潟の食文化を支える老舗も立地し、歴史薫る市民の憩いの街となっている。今回実践された事業はこの地区の施設に市民から借り受けた屏風や掛け軸などの作品を展示公開し、それらを鑑賞し体験してもらうことを大きな目的とした。

事業の実施にあたり屏風や掛け軸等の作品を市民から紹介され、それらを各施設の空間に設えて臨んだが、その他にも家具や調度品の類も数多く拝見することができた。それらの中にはユニークな形状の品や珍品に至るまで興味をそそる品が数多く存在していたが、それに加えて資料をお借りした方々からそれらについての思い出話を聞くことが楽しく、心躍る時間となった。資料が鑑賞されたり使われたりした時の家族の時間、そしてその時間に起きた街の記憶をお聞きすることは、想像する楽しさをあらためて感じる時間ともなった。もちろんこれらのやりとりが展示の舞台に上がることはないが、コミュニティやコミュニケーション活動が今回の

展示の幅を広げたことは間違いないだろう。

新潟大学旭町学術資料展示館は開かれた大学博物館を目指して前進しているが、大学内における研究・教育を積極的に展示に結びつけることは当然のこと、市民が所有している貴重な資料や作品などを公開するとともに、市民とのやりとりを通して生まれた交流を披露することも展示館としての大きな使命と考える。

結びに、今回の事業において得た様々な知見をもとに新潟大学旭町学術資料展示館が新たな一歩を踏み出した姿を皆さんに感じ取っていただきたい。



市民宅の蔵から資料を搬出する丹治館長

— 近世から現代まで —
 発掘・体験プロジェクト
**新潟の
 芸と風土**
 みなとまち

令和5年度の文化庁Innovate MUSEUM事業に採択され、近隣の文化施設と共に実行委員会を立ち上げ、本プロジェクトを実施しました。

1. 地域に残る作品・資料の収集とアーカイブ

新潟市内に残る美術・工芸品を所蔵する市民から見せていただき、保存・管理の実態などお話を伺いました。許可をいただいた作品(展示しない作品を含む)を撮影しました。



撮影した作品

2. 関連展示とイベント

展 示 みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト—近世から現代まで

2023年10月25日(水)～11月26日(日)

プロジェクト中核館である新潟大学旭町学術資料展示館、プロジェクト連携館及び近隣の文化施設、料亭、寺院など9会場で、新潟市内に残る美術・工芸品などの作品を展示しました。あわせて新潟大学旭町学術資料展示館では、新潟大学の東洋美術史の研究成果も展示しました。各会場を巡ることで地域の歴史・文化・芸術を体感していただきました。

各会場の様子



旭町学術資料展示館



砂丘館



旧齋藤家別邸



行形亭



北方文化博物館 新潟分館



正福寺



加島屋



旧小澤家住宅



新潟市歴史博物館

体験講座

名作とコラボしよう！ 俊明さんの《龍虎図屏風》

2023年9月23日(土・祝)



体験講座の様子



完成作品

本プロジェクトの中心事業となる作品展示の開催前に、体験講座を実施しました。江戸時代の越後の絵師・五十嵐俊明の《龍虎図屏風》を題材に、一般市民と新潟大学学生とが日本画の技術を応用した作品づくりを行いました。

シンポジウム

みなとまち新潟の歴史文化遺産 — 継承、公開、活用

2023年11月11日(土)



シンポジウムの様子



日本全国で文化財が失われている現状をふまえ、地域に残る文化財の継承・公開・活用を考えるシンポジウムを開催しました。事例発表とディスカッションにより参加者と問題意識を共有しました。

コンサート

ちょっとおしゃべりなコンサート — 音楽ことはじめ

2023年11月23日(木・祝)



コンサートの様子



五十嵐俊明が活躍したのと同時代の音楽家を扱った演奏会を実施しました。演奏の合間には専門家による美術や音楽の解説を行い、日本と西洋、美術と音楽について考え思いを馳せる時間を楽しんでいただきました。

まち歩き

2023年11月19日(日)・11月25日(土)

*11/18は荒天のため中止

新潟シティガイドと連携し、展示会場を巡りながら地域の歴史や文化を体感できるまち歩きを実施していただきました。



まち歩きの様子

来場者やイベント参加者からは、「歴史的建造物の中で作品鑑賞できた」「郷土にいがたの豊かな芸術文化や歴史を再発見する機会となった」「地域の文化財の保存・継承の大切さを再認識した」といった声が寄せられ、鑑賞者にとって本プロジェクトが新たな気づきのきっかけとなったことが窺い知れました。

本プロジェクトの特設サイトで、プロジェクト概要、記録集、アーカイブした美術作品の写真を公開しています。ぜひご覧ください。

URL : <https://www.lib.niigata-u.ac.jp/tenjikan/innovatemuseum2023/>



企画展「グッズが語るアートのカ 芸術祭は地域を変えたか？」

2023年5月3日(水・祝)～6月4日(日)

人文社会科学系フェロー 寺尾 仁

この展覧会は、現代美術作品の展示を中核として美術館内外を問わずに会場とする大規模な展覧会の特徴を、公式グッズから読み解くことを目指した。この点に関心をもったのは、大規模芸術祭が東アジア・東南アジアで数多く創設されており、その目的が美術の先端を切り拓くだけでなく、外部効果、例えば、観光客の増加、地元の企業・教育機関等のデザイン力の強化などを含んでいる点である。新潟県では日本の大規模芸術祭の代表格とも言える「越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭」が開催されている。私たちは2018年度から人文社会科学系長等裁量経費を得て芸術祭の比較研究に取組み、この展覧会はその成果発表の場として企画した。



大地の芸術祭は、市町村合併を通じたこの地域の振興が主目的だった。公式グッズとして「大地の米」という地元産こしひかりや地元産こしひかりを原料とするどぶろく「大地の酒」を販売し、その米を栽培するための資金・労働力を募る「棚田バンク」を結成して芸術祭事務局を担うNPOがその事務局も担当している。これに対して、群馬県中之条町で隔年に開催している「中之条ビエンナーレ」も中山間地の振興を目的とするが、公式グッズで目立つのはデザイン化された地元の文物である。その代表がTシャツ2017で、開催にあたり町内を6つに分けた各地区の地形をデザインした6種のTシャツを制作し、6枚合わせると町の地形になるという趣向である。

当該芸術祭が目指す外部効果の特徴は、作品や催物よりもグッズに如実に表われる。この展覧会では、同じ中山間地活性化を目的とする2つの芸術祭の特徴を際立たせるべく、同じ展示室で大地の芸術祭の「大地の米」をそれが取れた棚田を模した展示台に置いて周りを「大地の酒」など米関連の加工品で囲み、中之条ビエンナーレのTシャツをハンガーに掛けた。前者が棚田における労働そのものが地域の活性化の鍵となるのに対し、後者はデザインが地域の未来を拓くとする、という解釈を表現したのである。

企画展「戦争を考える」

2023年6月17日(土)～7月30日(日)

新潟大学名誉教授 橋本 博文

2023年6月17日(土)～7月30日(日)まで、新潟大学旭町学術資料展示館2階の企画展示室を利用して恒例の戦争展を開催しました。当展は全学を対象とした教養授業(Gコード科目)の平和を考えるA(人文学部藤石貴代准教授コーディネート)の授業の一環として行われています。ロシアによるウクライナの軍事侵攻やイスラエル軍とイスラム組織ハマスによるパレスチナ自治区ガザで続く戦闘、北朝鮮によるミサイル開発など国際社会から「平和」の名が消えかかっています。

そこで、2023年度のテーマは、主に地図と教科書を取り上げました。前者の地図は、新潟ハイカラ文庫の笹川太郎コレクション、後者の教科書はわたし橋本のコレクションを中心に展示しました。地図では、原爆の投下候補地とされていた新潟市街の地図が注目されました。日本側で製作された地図には、信濃川河口付近の軍需工場などは表現されず空白になって機密情報として描かれていません。一方、米軍側製作の地図では、信濃川を横断する地下トンネル状のものまで記されています。

教科書では、墨塗り教科書をメインに扱いました。墨塗り前と墨塗り後の同じ教科書を比較して見られる展示にしました。それによってGHQにとって何が不都合だったのかが読み取れます。

また、ポスターに使用した高田三十連隊軍事教練参

加者の自筆要望書には、上官の振る舞いや貧しい食事に対する不平不満が赤裸々に書かれています。

「新潟大学と戦争」のコーナーでは、恒例の医学部脳外科教授中田瑞穂先生へ戦地から送られた教え子の手紙や、軍事教練に使用された木銃の戦後消防用に利用された鳶口などの他に、中田先生の教え子、蒲原宏先生と山内大刀先生の戦争を詠んだ俳句集『一句集 愚戦の傷跡一』、『句文集 春聯』を新たに展示しました。学生には手に取って戦争責任問題などじっくり読み味わってもらいたいものです。

さらに、新規に入手した戦勝記念スタンプ帳を展示館所蔵の同種スタンプ帳と対比しながら並べました。この種のスタンプ帳が国民を戦争に駆り立てる上でのプロパガンダに利用されたことがうかがわれます。

戦争の語り部が年々減少していく中、残された寡黙な戦争遺物や戦争遺跡・遺構を保存し、次世代に受け継いで平和教育に活用していきたいものです。



ギャラリートークを行う橋本博文名誉教授

企画展「みんなの石」展

2023年7月19日(水)～8月31日(木)

大学院自然科学研究科(2024年3月修了) 漆山 凌

「石」と聞いて皆さんは何を思い浮かべますか？建物に使われている「大理石」や墓石に使われている「花崗岩」など、私たちの身近にはたくさんの「石」があります。今回はそんな「石」についての企画展です。

企画展「みんなの石」展は新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」で開催されました。会場には新潟県内の3つのジオパーク（糸魚川、佐渡、苗場山麓）で見られる「石」を展示しました。会場の片側の壁には、隙間なく写真パネルを張りました。写真は岩石をスライドグラスに張り付けて薄く削った「薄片」と呼ばれる標本を顕微鏡で撮影したものです。写真パネル自体には説明書きを付けず、「なんだ、この写真は！？」と思ってもらえるようにしました（写真に使った石とその説明はパネル下に展示）。反対側の壁には、岩石の成因についてと地質学研究についての解説パネルを展示しました。身近にある「石」がどんなところでできたのか、大学では「石」を使ってどんな研究をしているのかを知ってもらえるようなパネルに仕上げました。中央には展示ケースを置き、糸魚川産の化石を展示しました。また机と椅子も置き、机上に化石スケッチ、地質塗り絵、動物折り紙を設置しました。

8月22日には、イベントとして「ふれあいトーク」を実施しました。内容は、理学部の松岡篤教授による展示解説と、化石のスケッチでした。たくさんの親子が参加され、展示解説では松岡篤教授による興味深いお話に興味津々に耳を傾けていました。化石スケッチは、糸魚川の青海石灰岩から採取された化石の一つを選んで描くというもので、参加した方々は楽しんで取り組まれていました。今回の企画展示を通じて「石」について興味を持ち、「もっと石を知りたい！」と思ってもらえたら幸いです。



「ふれあいトーク」で解説する松岡篤教授

企画展「生きている植物標本のタネ」

2024年2月10日(土)～3月24日(日)

教育学部理科教育専修4年 板垣 沙也加

生物標本は地域の自然の記録や、新しい種を記載した際の証拠など、様々な用途・目的で作られています。このような標本は100年以上前から採集され、膨大な量の標本が博物館や植物標本庫に収蔵されています。近年、植物の標本に残っているタネの中に生きているものがあることがわかってきました。今後、自然の記録や種の記載の証拠以外にも、標本に残っているタネを使って絶滅してしまった植物を復元させることができるようになるかもしれません。本企画展『生きている植物標本のタネ』では、私が所属する教育学部植物学教室が中心となって、このような植物標本に残されたタネや胞子の発芽可能性や学術的な価値についてご紹介しました。

本企画展では新潟大学植物標本庫を中心に集められた様々な標本をパネルとともに展示をしました。文字パネルでは植物標本の説明から、これまで行われてきた標本種子の研究成果も並べて紹介しました。また、いくつかの植物については標本庫に収蔵されていた実際の標本資料に加え、標本から取り出されたタネや、発芽に成功したタネもいくつか展示をしました。私は展示作業を行うのは初めてで、慣れない中の作業でしたが、配置の順番やバランス、アイデア出しなど多くの場面で先生や先輩方と協力して設営することができました。その中のアイデアとして、ただ標本や文字パネルを並べるだけでなく、タネの展示も様々な場所に

ちりばめました。ここでは日本産のタネや果実に加えて、海外で採集された薄い羽を持っているハネフクベ（アルソミトラ）のタネや、中身が青い色をしたタビビトノキの果実なども展示しました。また、「まき菱」にも使われていたオニビシのタネの殻や、数種類のドングリに加え、身近なコーヒー豆やお米など、いくつかの種類タネは実際に手にとって観察できるような展示を行いました。一言に「タネ」といってもすべてが同じ形のタネではありません。観覧者の方々にも「どうしてこんな形なのだろう」などと考えを広げていただけたのではないかと考えています。

今回の企画展示を通じて多くの方々に植物標本やタネについて理解を深めていただき、その学術的な価値を考えていただくきっかけになったら、展示作製に関わった者として嬉しく思います。



常設展示室よりートキ剥製標本ー

旭町学術資料展示館 清水 美和

常設展示室では新潟大学が所蔵する貴重な学術資料を展示しています。今回は1階「自然・技術の歩み」展示室より、トキ剥製標本についてご紹介します。

展示室に入ると、ほとんどの来館者の目はまず最初にこのトキ剥製標本に惹きつけられるのではないのでしょうか。羽には淡く朱鷺色が残っており、大空に羽ばたいていた頃の姿を思い描くことができるオス成鳥の剥製標本です。

日本本土の各地で見られたトキは、明治期に入ると乱獲や田畑の害鳥として駆除されるなどして個体数が減少したことから明治41(1908)年、保護鳥に指定されるまでになりました。その後昭和9(1934)年に国の天然記念物、戦後になると昭和27(1952)年に国の特別天然記念物、昭和35(1960)年には国際保護鳥に指定され、地域や行政による保護がおこなわれてきました。しかしながら、昭和56(1981)年になり日本で生息する最後の5羽を捕獲し人工的に飼育したことで野性のトキは絶滅し、その後、平成15(2003)年、日本産のトキは絶滅となったのです。

新潟大学には4体(うち1体分はばらばらの標本)のトキ剥製標本が保管されています。当館で展示中の標本番号37¹⁾は、昭和36(1961)年1月3日に新潟県五泉市で射殺された状態で発見されました。当時の新聞記事には「“トキ”五泉でナゾの死」の見出しで取り上げられ²⁾、既に国内の生息数が佐渡と能登半島で合わせて10羽ほどが確認されているだけになっていたことから、どこから来たのか、もしくは、五泉周辺に知られていない生息地があるのかなどの憶測を呼びました。また、当時新潟県文化財委

員を務めていた新潟大学理学部の江村重雄教授が射殺された鳥の鑑定をおこない、トキと確認されました。撃った人は狩猟法・文化財保護法違反に問われるとすることで、トキの剥製は証拠物件として裁判所に保管されました。その後事件性は無いと判断され新潟大学に移管されたといういわくつきのものです。

現在、新潟大学は佐渡自然共生科学センターにおける朱鷺・自然再生学研究施設を中心に、学術分野を横断するかたちでトキと共存する社会の実践・提案を目指しています。そんな新潟大学との長く強い結びつきを、このトキ剥製標本は語りかけているように思います。

- 1) 標本番号は、『トキ保護の記録ー特別天然記念物、国際保護鳥トキ保護増殖事業経過報告書』新潟県編、2000年による
- 2) 新潟日報 昭和36年1月24日 日刊7面記事



新潟大学全学同窓会のご支援により展示ケースが新しくなりました

2023年度新潟大学全学同窓会「雪華支援事業」の助成を受け、1階常設展示室の展示ケースが新しくなりました。

同室では、旧制新潟高等学校や旧制長岡高等工業学校で使用された歴史的実験機器を、当時の木製展示ケースに入れて展示しています。この度の助成により、古くなった金属製の展示ケース2台を木製のものへ入れ替え、部屋全体の設えと雰囲気と統一しました。展示館のレトロな建物とも調和した、大学の歴史を感じていただける空間となりました。

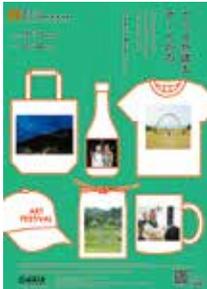
ご支援をいただいた新潟大学全学同窓会には、心より御礼申し上げます。



令和5年度 活動記録

企画展示

会期	タイトル	展示室	担当
2023.5.3(水祝)~6.4(日)	グッズが語るアートの力ー芸術祭は地域を変えたか?ー	企画展示室	人文学部・工学部
2023.6.17(土)~7.30(日)	戦争を考える	企画展示室	人文学部
2023.7.19(水)~8.31(木)	「みんなの石」展	駅南キャンパス ときめいと	理学部
2024.2.10(土)~3.24(日)	生きている植物標本のタネ	企画展示室	教育学部



Innovate MUSEUM事業 展示・イベント

会期	タイトル	講師	会場
2023.10.25(水) ~11.26(日)	みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト ー近世から現代まで		企画展示室
2023.9.23(土祝)	体験講座「名作とコラボしよう! 湊明さんの《龍虎図屏風》」	永吉 秀司 (新潟大学教育学部准教授)	ゆいぽーと (新潟市芸術創造村・ 国際青少年センター)
2023.11.11(土)	シンポジウム 「みなとまち新潟の歴史文化遺産ー継承、公開、活用」	久保 有朋 (旧齋藤家別邸学芸員・古町花街の会事務局長) 佐藤 琴 (山形大学附属博物館学芸研究員・ 山形大学学士課程基盤教育院准教授) 吉原 悠博 (古原写真館館主・写真町シバタ実行委員長・ 新発田まち遺産の会副実行委員長)	新潟市美術館
2023.11.19(日)	新潟まち歩き 西大畑コースB	新潟シティガイド	加島屋、正福寺、砂丘館、 旭町学術資料展示館
2023.11.23(木祝)	「ちょっとおしゃべりなコンサートー音楽ことはじめ」	山本 緑(武田蘭) (洗足学園音楽大学講師) 奈良 秀樹 (新潟大学教育学部ヴァイオリン専攻卒業生) 麻野 恵子 (洗足学園音楽大学講師) 永吉 秀司 (新潟大学教育学部准教授)	スタジオオスガマタ
2023.11.25(土)	新潟まち歩き 下町コース	新潟シティガイド	新潟市歴史博物館、 旧小澤家住宅、加島屋

フォーラム・講演会

開催日	タイトル	講師	会場
2023.6.3(土)	講演会「唄半給金~越後の酒造り唄~」 (第19回新潟大学あさひまち友の会総会記念講演会)	伊野 義博 (新潟大学名誉教授)	駅南キャンパス ときめいと

ギャラリートーク・体験教室・その他イベント

開催日	タイトル	講師	会場
2023.5.20(土)	ギャラリートーク 「グッズが語るアートの力」関連イベント)	寺尾 仁 (新潟大学人文社会科学系フェロー)	企画展示室
2023.5.30(水)	鼎談「芸術祭の楽しみ」 「グッズが語るアートの力」関連イベント)	寺尾 仁 (新潟大学人文社会科学系フェロー) 田中 咲子 (新潟大学人文学部・教育学部教授) 棒田 恵 (新潟大学工学部准教授)	総合教育研究棟 B棟
2023.7.8(土)	ギャラリートーク 「戦争を考える」関連イベント)	橋本 博文 (新潟大学名誉教授)	企画展示室
2023.8.22(水)	ふれあいトーク 「みんなの石」展関連イベント)	松岡 篤 (新潟大学理学部教授)	駅南キャンパス ときめいと
2024.2.24(土)	ギャラリートーク「植物標本のタネと生物保全」 「生きている植物標本のタネ」関連イベント)	志賀 隆 (新潟大学教育学部准教授)	企画展示室

友の会行事

開催日	テーマ
2023.6.3(土)	第19回新潟大学あさひまち友の会 総会

令和5年度 入館者数

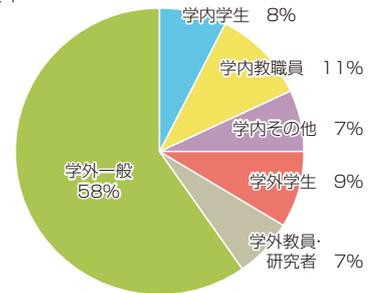
● 入館者数 (2023年4月～2024年3月)

月	学 内			学 外			計
	学 生	教職員	その他	学 生	教員・研究者	一 般	
2023年4月	24	32	11	14	9	41	131
5月	18	25	7	6	4	145	205
6月	22	19	9	3	20	87	160
7月	58	14	13	27	10	142	264
8月	7	13	10	62	13	81	186
9月	4	16	11	5	12	59	107
10月	1	26	5	0	17	101	150
11月	10	27	15	10	17	146	225
12月	2	11	16	2	9	36	76
2024年1月	2	9	16	0	4	31	62
2月	7	13	7	14	14	131	186
3月	8	14	12	26	14	126	200
計	163	219	132	169	143	1,126	1,952

※開館日：水～日曜日(の)の週5日間 夏季休館：8/16～18 臨時休館：11/23午後、12/22午後～12/24

● 団体入館者

日 付	団体名	人 数
2023.11.9(木)	シニアカレッジ新潟	14名
2023.11.19(日)	えんでこ まち歩き	9名



● 講義・実習等での活用

日 付	講義・実習名	人 数
2023.4.15(土)	放送大学新潟学習センター面接授業「われらの地球」	14名
2023.6.17(土)～7.30(日)	全学教養科目「平和を考えるA」	56名
通 年	博物館見学実習	50名

新潟大学旭町学術資料展示館ニュースレター

あさひまち

第22号

■ ISSN 2185-7431

■ 発行年月日 2024年7月25日

■ 編集・発行 〒951-8122
新潟市中央区旭町通2番町746
新潟大学学術資料運営機構旭町学術資料展示館

■ 印 刷 富士印刷株式会社

新潟大学
旭町
学術資料
展示館

Niigata University
Asahimachi Museum

編集後記

昨年は新型コロナウイルス感染症が5類に移行しました。様々な施設への入場制限がなくなり、以前の生活に戻りつつある中で、当館でも令和5年度文化庁Innovate MUSEUM事業(みなとまち新潟の芸と風土 発掘・体験プロジェクト)をはじめ、様々なイベントを開催しました。これらの催しに参画していただいた皆様には心より感謝申し上げます。

こうした展示館の催しが皆様にとって、コロナ後の新たなスタートとなり、希望に満ちた時間となったであろうことを心から願っています。

